

PWE (Paddy and Water Environment) 誌のこれまでと今後の抱負 Perspectives of the PWE Journal (published by Springer) of PAWEES

増本隆夫*

MASUMOTO Takao*

1. はじめに

これまで、佐藤洋平（東大名誉教授）、中野芳輔（九大名誉教授）、溝口勝（東大）の Editor-in-Chiefのもとで、一流英文誌の発刊、インパクトファクター（IF）の取得、モンスーンアジアの水田農業研究の世界への情報発信を目指し、PWE (Paddy and Water Environment) は農業農村工学会が支える国際誌として一定の評価と位置付けを得てきた。この結果は、財政の基盤となる購読会員や編集に携わった多くの研究者、PAWEESや本部学会の事務局の支援のお陰ともいえる。

ここでは、編集体制を新たにした機会を捉え、これまでのPWEの変化を振り返りながら、今後の活動の方向と抱負を纏める。

2. PWE 掲載論文の変化

PWE は日本・韓国・台湾が中心になって 2003 年に発刊したこともあり、当初は 3 カ国からの投稿が中心で、必要な投稿原稿を集めるために学会の邦文論文を英文にした論文投稿を促した時代もあった。年間の投稿数が 200 編近くなり、その中で 30~60 本の受理しか行われな最近は、オリジナル論文の投稿が主で、受理論文をみれば、3 カ国の中で中心となっていた日本の論文に加え、韓国や台湾の論文数が増大し、さらに近年は中国やインドを含めたアジア諸国全体に広がりつつある (Fig.1)。一方で、欧州や北米からの論文数は一定の本数に留まるにもかかわらず、印刷された論文のダウンロード数は両地域が大きな割合を占めてきており (Fig.2)、PWE が目標としてきたモンスーンアジア水田農業の世界への情報発信という目標はある程度達成されてきたことになる。全世界の国際誌からの PWE 論文の引用数をみると第 1 著者がアジア以外のもの 50% 近くになっていることから、同様な注目度になっていることがいえる。年間の論文ダウンロード数は、最近では 3 万件 (2015 年:33,509 本) を越えてきている。

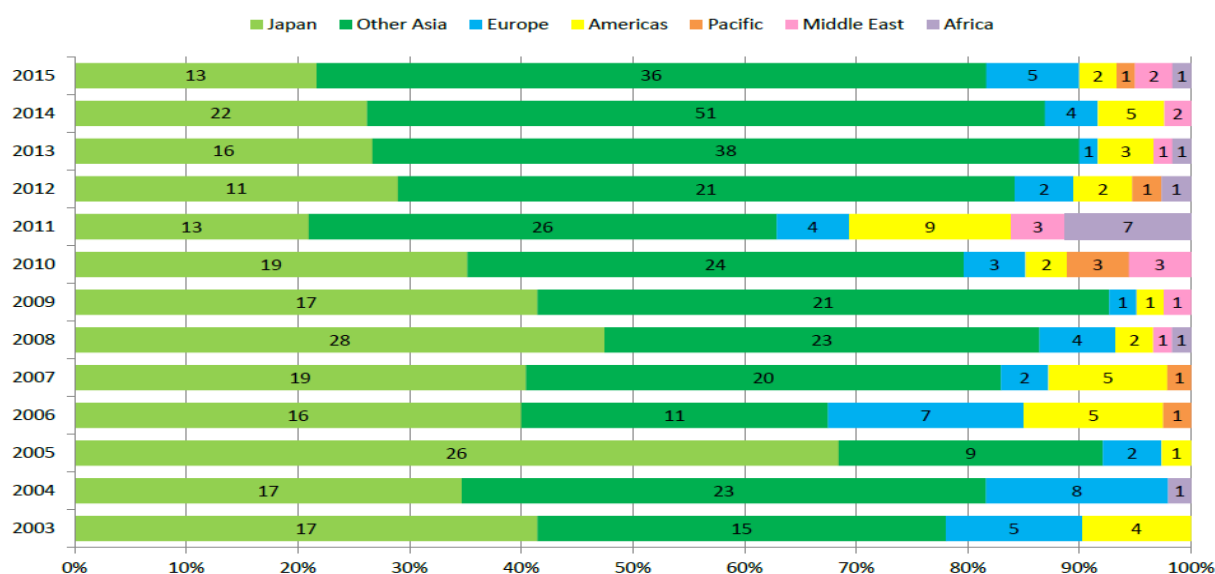


Fig. 1 受理論文の国別採用本数
Location of authors of the papers published in PWE

* 農研機構農村工学部門 Institute for Rural Engineering, NARO (NIRE)
キーワード: PAWEES, PWE, インパクトファクター (IF)、編集体制

3. PWE 編集体制の課題

現在の編集体制は、Editor-in-Chief(1)、Chief Managing Editor(1、補佐1)、Managing Editors(4)、Editors(18)の4段体制であるが、Managing Editorの役割が曖昧で(査読システムの設定問題も含む)、現状では3段での

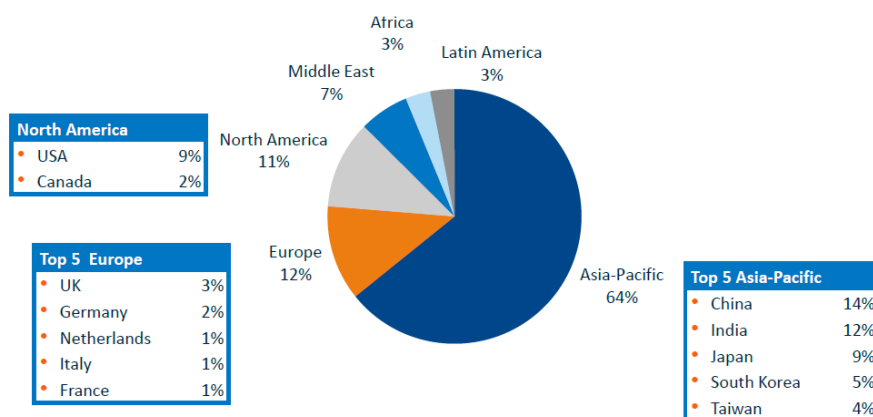


Fig.2 PWE論文のダウンロード地域 (2014年)
Downloads of PWE papers by regions (2014)

対応で Chief Managing Editor に過大な負担がかかっている。投稿数が近年多い中で(2013～2015年平均:約180本)、処理の集中化を避け、役割分担が必要である。受理して出版可能な論文数は財政上の問題から、1/3程度に限られる。質の高い論文の投稿への呼びかけ、査読期間の短縮化、reject論文への丁寧で建設的コメントの返し等が必要である。Editorsの査読者選びは困難を極め(PWEの著者推薦の査読者でも査読拒否は多い)、全てEditorの努力に委ねられている。PWEは年4回発行されるが、3,6,9,12月(2003～2012年)、1月(2013年)、1,4,7,10月(2014年～現在)の変更があった。インパクトファクター(IF)は若干低下傾向にある(Fig.3)

4. PWE誌の今後

前述の編集体制の強化のために、体制を定期的に更新していくことと、組織的な対応が必要である。前者には、例えば2～3年の任期制(再任可)にし、後者には、農研機構、JIRCAS、寒地土研、IWMI等が組織として編集をバックアップする方法、さらには将来の編集委員の発掘のため、大学や研究機関の中から、PWE支援に興味ある若手のリストアップ等も必要かもしれない。編集体制の中にはEditing Board(現在29名)も存在するが、この役割の変更(例えば、世界各所の著名研究者を登録し、PWE誌の外部評判の向上とEditorsが査読者を捜したい際に相談相手になる役割)もあり得る。出版可能論文数を増やす試みとして、印刷部数削減とダウンロード版公表制度が予定されているが、財政基盤を支える登録会員には毎年のIDとパスワードの配布等のサービスも必要であろう。一方、Chief Managing Editorへ集中していた、投稿論文担当のEditor選びや掲載決定までの論文トラック、発行号の印刷ゲラの最終確認等を、複数のManaging Editorで分担することも検討したい。さらに、編集委員会の開催による(日本4名だけでも)密な情報交換も同時に役立つ。大きなプロジェクト推進中の研究者や機関を見つけ、特別号(過去に8号の内スポンサー号は2号分)の機会の提供、著名な研究者にレビュー論文投稿の依頼、相互の引用促進等、地道な努力がIFの低下防止には重要かもしれない。

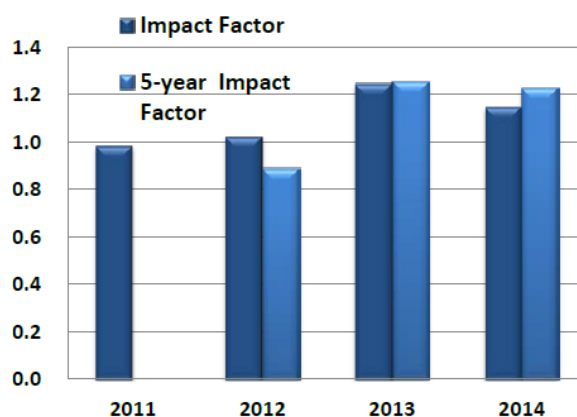


Fig.3 IFの推移
Change of IF of PWE

5. おわりに

新たなManaging Editorの藤原信好(JIRCAS)、アンドリュー・ウティカー(新潟大)、中村公人(京大)の各氏や新規就任の日本人Editors諸氏の協力を得て、減少傾向にある単年・5年間IFの1.0を死守し、右肩上がりの増加に反転させるような編集活動を目標にしたいと考えている昨今である。